

パッチワーク・キルトについて

1. はじめに

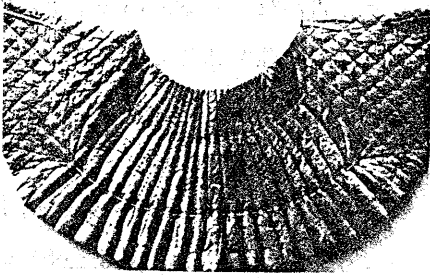
奥 平 志づ江
原 ますみ

布，又は皮等の端布（パッチ）を接ぎ合わせた表布（キルト・トップ）と，裏布（バックング，又はライニング）の間に詰物（パデング，又はフィラー）をして一緒に刺し子（キルティング）にしたものをパッチワーク・キルト（PATCH WORK QUILT）と言っている。パッチワークと言えば殆んどキルト（刺し子）仕上げになっているから，パッチワークもキルトもパッチワーク・キルトの意である。又個々のパッチを接がずに，台布にアップリケした場合もパッチワークに含まれる。アメリカン・アンティーク・キルトは最近特に見直され，デパートの手芸コーナーや雑誌等にも数多く紹介されて，この頃ブームの感がある。このように，キルトが急に脚光を浴び，人々の歓心を買うようになったのは，布が得難く貴重であった頃の人々の工夫と芸術が，懐古趣味も手伝って再評価されたためであろう。個々の作品を観察すると何れも個性的で奇抜な配色，構図を凝らしたものが多いのには驚く程である。

2. キルトの由来と種類

キルトという言葉は，ラテン語の「CULCITA」（詰め物をした袋）に由来した呼び名である。キルトは古代からあった手芸で，エジプトの第一王朝時代のファラオ（紀元前3400年頃）の象牙の彫刻にキルトされたマントが彫られている。又ガゼル（かも鹿の一種）の皮を接いで作った天幕（紀元前980年頃）が，カイロのブーラック博物館にある。紀元前100年～200年頃の蒙古の墓の床には，木と動物のアップリケを渦巻き状にキルトしたじゅうたんが発見されている。サラセンの騎士達が，着心地の悪い鎧の下に，防寒を兼ねて着用していたキルト（図1）が12世紀に，十字軍によりヨーロッパにもたらされ，貴族の婦人達の間でキルト作りが広まった。18世紀頃のイギリスでは，キルトが，ベットカバーや女子用のペティコート（図2）にも利用されるようになった。ビクトリアン・クレージー・キルト（図3）はこの時代の秀れた創作であり，ありきたりの端布を無作為に接ぎ合わせた素晴らしいもので，今なお特異な人気をもっている。

アメリカン・アンティーク・キルトは、17世紀にイギリスがブリティッシュ・キング

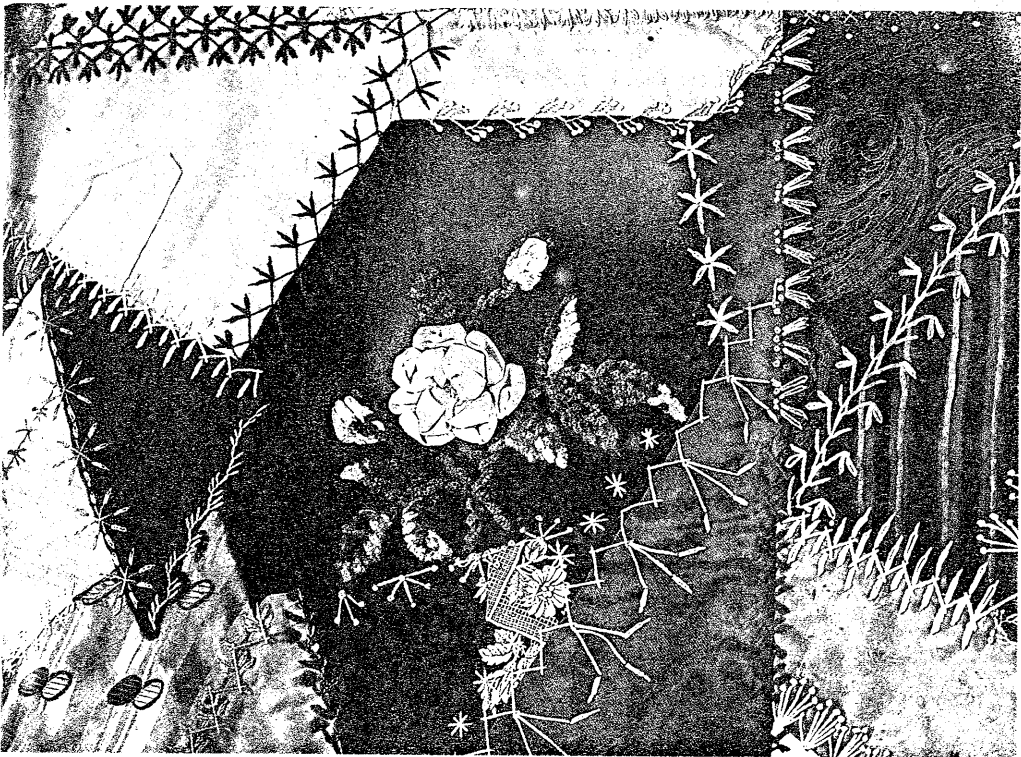


(図1) キルティングされた鎧の下衣
スペイン16世紀

ダムを確立した頃にさかのぼる。アメリカ大陸に渡った移住者にとって、食糧や衣類・寝具は特に大切なものだった。厳しい生活環境と貧困の中で、保温と儉約の必要から、着古した衣類を小切れにして綴り合わせ、キルティングを余儀なくされたのである。今から

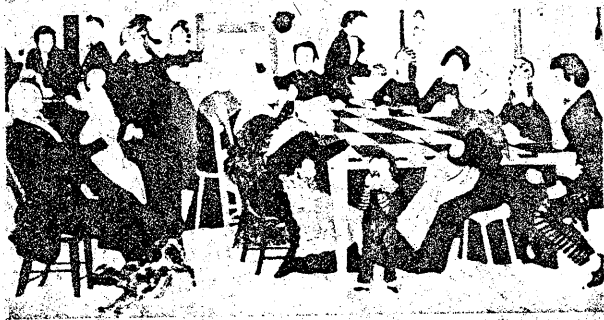


(図2) キルティングしたペティコート
イギリス18世紀

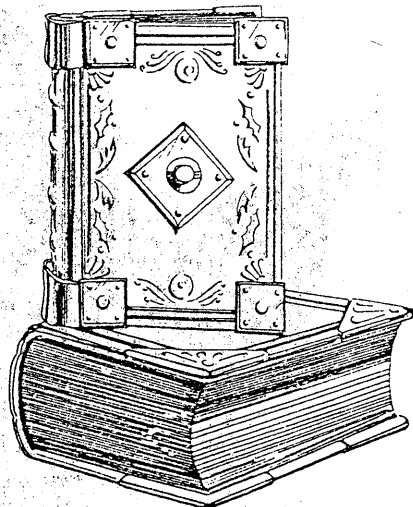


(図3) オペラ歌手のクレージーキルト (1893年作)

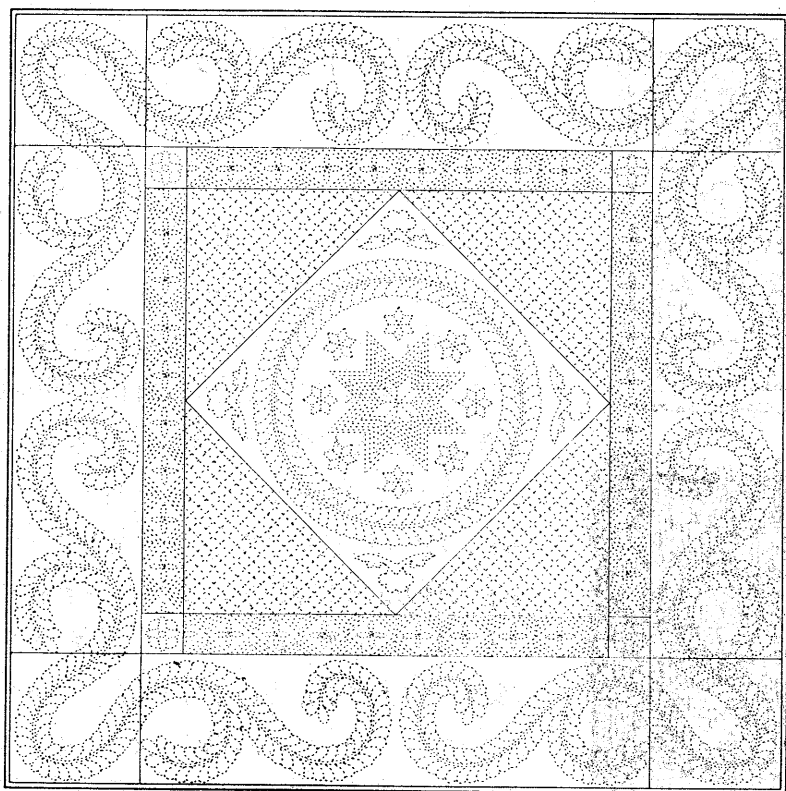
100年程前の北アメリカを舞台にした「インガルス一家の物語」の文中にも「キルトの上で遊ぶ」とか、「キルトをドアの代りに掛ける」などと書かれている。1840年から1920年頃がキルトの最盛期で、この頃のアメ리카女性たちは、生涯を通じて数多くのキルトを作りあげた。キルトが盛んになった一つの要因として、「キルティング・ビー」(QUILTING BEE)をあげることができる。キルティングは、創作とコミュニケーションを兼ねた社交の集いには恰好の作業であり、大勢の人が集まってキルトを刺す姿が、蜂に似ているところから、この名がついたようである。南北戦争(1861~65)の頃の「キルティング・パーティー」という絵(図4)には、当時の光景が描かれており、キルトワークが家庭生活の中で大切に育まれてきた事をうかがい知ることができる。キルティング・ビーを通して隣人愛が生まれ、結婚祝にブライド・キルト、成人祝にフリーダム・キルト、災害の見舞にフレンドシップ・キルト等が贈られた。現在でもワシントン州のオマク地方では、ミッド・バレー病院後援会という奉仕を目的としたキルティング・ビーがあるとされる。アメリカン・アンティーク・キルトの中で特筆すべきものに、アミツシュ・キルト(AMISH QUILT)とハワイアン・キルト(HAWAIIAN QUILT)がある。アミツシュ・キルトは、スイスからドイツへ、ドイツから米国ペンシルバニア州へと300年近い移民生活を続け、文明を拒み、質素を信条とし、今だに自給自足で農業に依存しているアミツシュ派から生まれたものである。彼らのキ



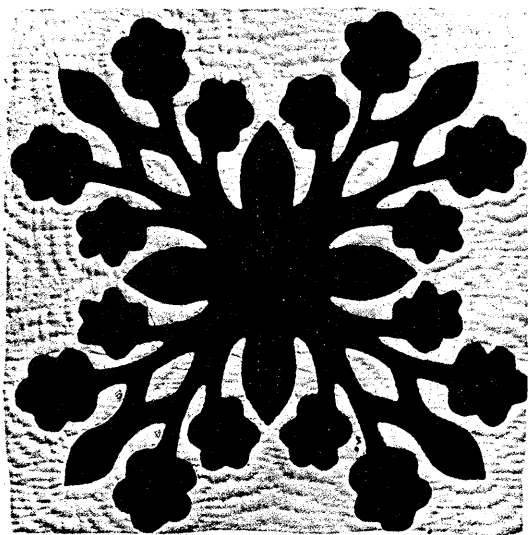
(図4) キルティング・パーティー



(図5-1) 讚美歌集



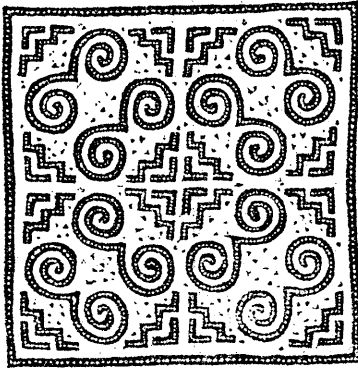
(図5-2) アミッシュ・キルト図案



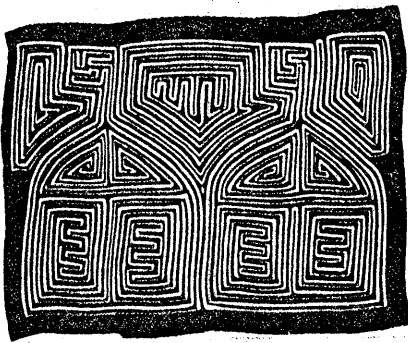
(図6) ハワイアン・キルト

キルトは、生活のベースであるキリスト教の讃美歌集の表紙（図5-1）にならい、簡素な無地の配色を基調としたものである（図5-2）。ハワイアン・キルト（図6）は、1820年、ニューイングランドから、友好のためにハワイへ渡った宣教師の夫人

達が始めたもので、折り重ねた布をハサミでカットして出来た模様をアップリケしたものである。これには自然風土をモチーフにしたものが多く、二色の原色からなる左右対称の大きな図柄が特徴である。その他、タイのメオ族によるメオ・クラフト（図7）、サンブラス諸島に住むクーナインディアンのもラ（図8）など、世界の到るところでキルト作品を見ることができる。



(図7) メオ・クラフト



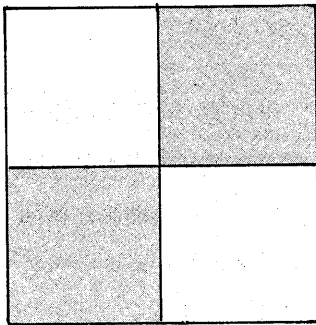
(図8) モラ

3. キルト・トップのパターン

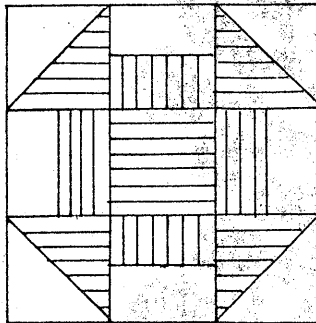
アメリカン・アンティーク・キルトのパターンの種類は200以上あり、クレイジー・キルトがその原型であるといわれる。

(1) 正方形と三角形のパターン

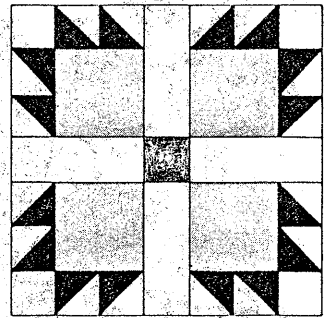
トラディショナル・パターンの中で最も多い正方形は、模様の1単位を4又は16、64の同じ大きさの正方形に分割する4パッチ(図9-1)と、9、36に分割する9パッチ(図9-2)の外に、模様の1辺を5等分、7等分してできる基盤の目のような単純なものから、それをさらに分割して三角形と組み合わせた複雑なもの(図9-3)まであり、その種類は多い。三角形だけのパターンは、「大洋の波」(図9-4)のように、つなぎ方と配色によって模様を変えることができる。



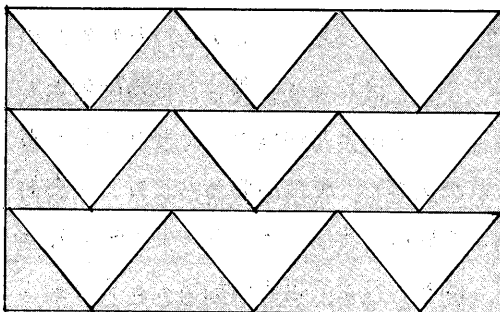
(図9-1) フォーパッチ



(図9-2) ナインパッチ・モンキーレンチ



(図9-3) クマの足跡

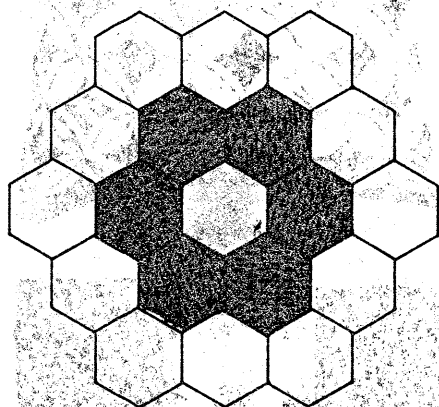


(図9-4) 大洋の波

(2) 六角形と八角形のパターン

六角形は、古代イスラム文化の遺産に多く残されているパターンである。その代表的なものに、「おばあさんの花園」(図10-1)と、ひし形に分割して立体感を表現した「積み木」(図10-2)がある。八角形のパ

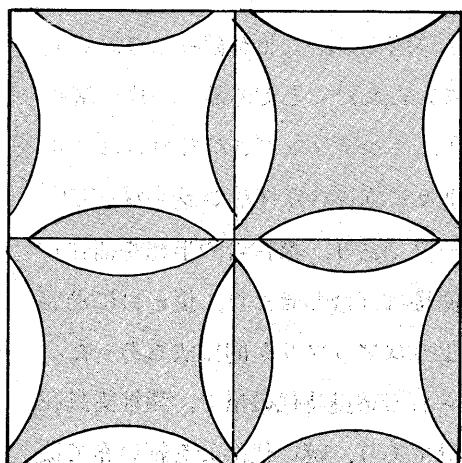
ターンは、三角形や四角形と組み合わせたもので、さらに「東洋の星」(図10-3)のように星形を変化させたものが多い。



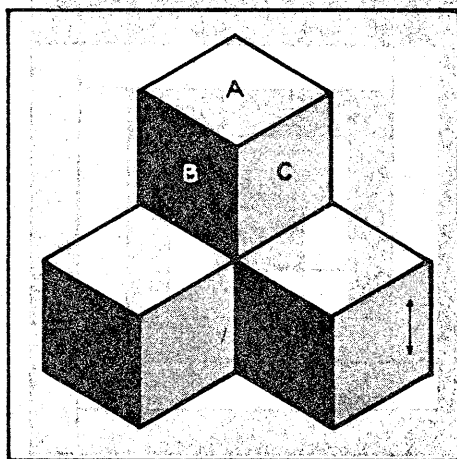
(図10-1) おばあさんの花園

(3) 曲線のパターン

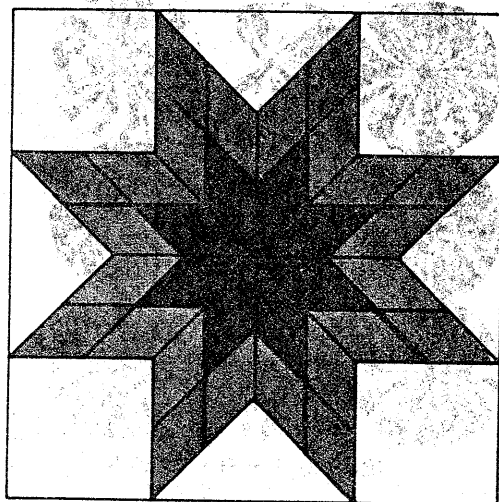
直線の物に比べて縫製が難しいので、この種のパターンは少ない。「ピーターからとってボールにやって」(図11)は、隣の色を少しくい込ませるなどの配色の工夫で、特異の効果を産み出したものである。



(図11) ピーターからとってボールにやって



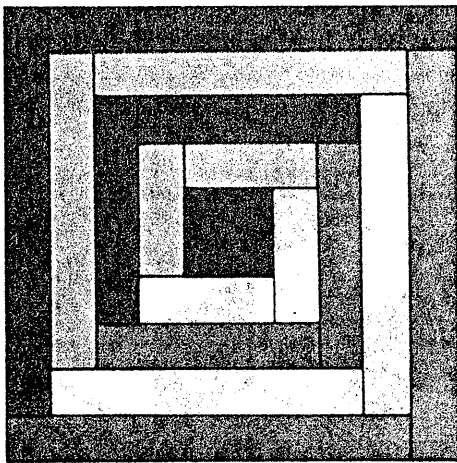
(図10-2) 積木



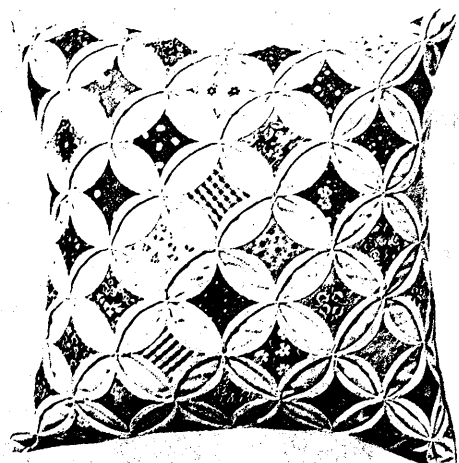
(図10-3) 東洋の星

(4) その他のパターン

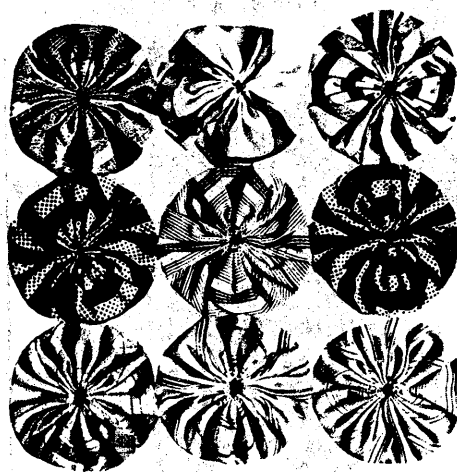
アメリカ開拓時代の初期に考案された「丸太小屋」(図12-1)は、ひも状の布を丸太を組むように縫い合わせていく素朴なパターンである。特殊なものでは、土台布を折り紙のように折ってつなぎ、中央に別布をはめ込んだ「大聖堂の窓」(図12-2)、詰め物を使わず布だけを縫い縮める「ヨーヨー・キルト」(図12-3)、ブロックのひとつひとつに綿を詰め、ふっくらさせて作る「パフズメイン」(図12-4)がある。



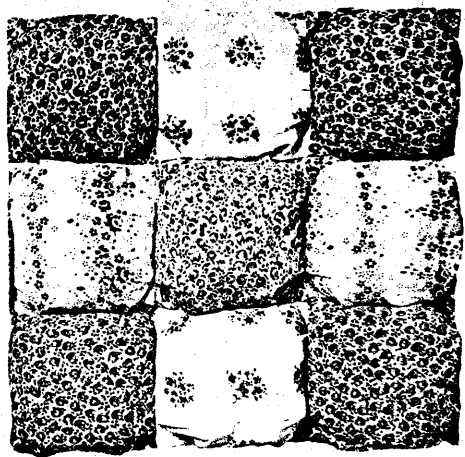
(図12-1) 丸太小屋



(図12-2) 大聖堂の窓



(図12-3) ヨーヨー・キルト



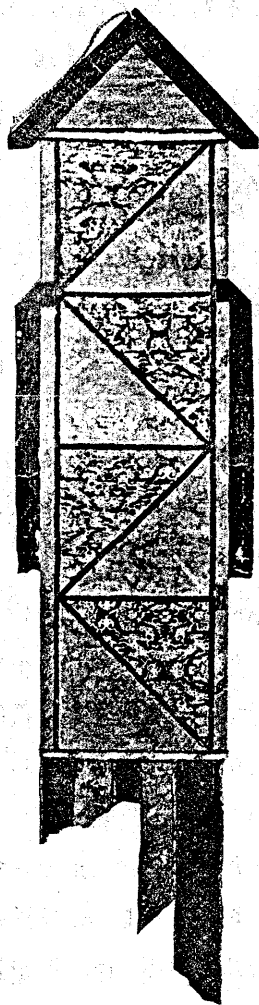
(図12-4) パフズメイン

4. 日本のパッチワークとキルト

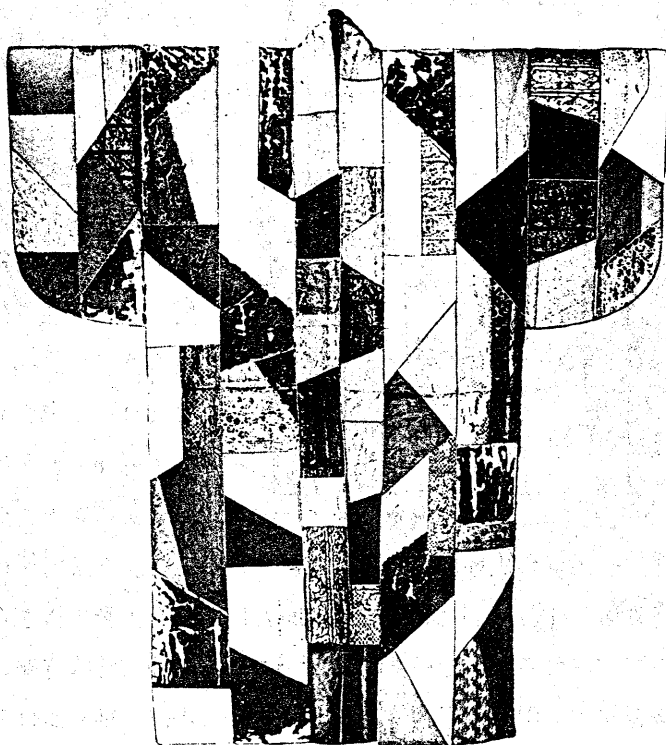
洋の東西を問わず布地の稀少価値が認められる生活環境では、衣類を繕ったり、補強するために、当布を縫い合わせる方法は遠い昔から考えられたことである。一片の端布(パッチ)を縫い合わせることもパッチワークであるが、キルティングされなければキルトとは言えない。日本ではパッチワークとキルトが別々に施された作品が多く残っている。「寄裂」^{よせぎれ}「切はぎ」等はキルトされないパッチワークであり、稽古着や半纏を補強した刺し子はキルトだけである。2種類以上の小裂を直接はぎ^{きりば}合わせたり、接ぎ目に別裂を細くはさんで縫い合わせる方法や、切嵌めなどのようなアップリケ的技法もあった。「錦の幡」(正倉院御物)(図13)は原型がそのまま見られる奈良時代の幡で、紫地雲鳥花奔走羊文と緑地獅子唐花文の三角形の錦を縫い合わせてあり、縫い代部分を細い布で覆い、裏布はない。上杉謙信の「金銀欄緞子等縫い合わせ胴服」(上杉神社蔵)(図14)は、

室町時代の物で、緞子、綸子、縞子等の名物裂をわざと切ってはいた贅沢なパッチワークである。江戸時代の物としては、西陣織、錦織、緞子等の生地布を接ぎ合わせて作ら

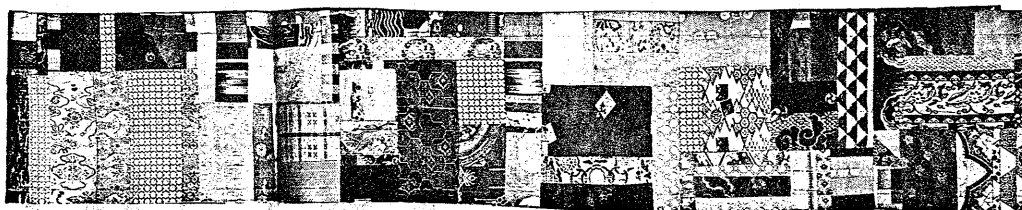
れた帯地の「名物裂縫合せ片側帯」(国立博物館蔵)(図15)がある。江戸時代末期の大商人、津国屋藤兵衛という人が、日本橋の大丸で唐棧の変わり柄25反の端を切って半纏を作らせたという昔話も伝えられている。半衿を継ぎ合わせて作ったこたつ布団、手ぬぐいを接ぎ合わせた浴衣、端布を継ぎ合



(図13) 錦の幡



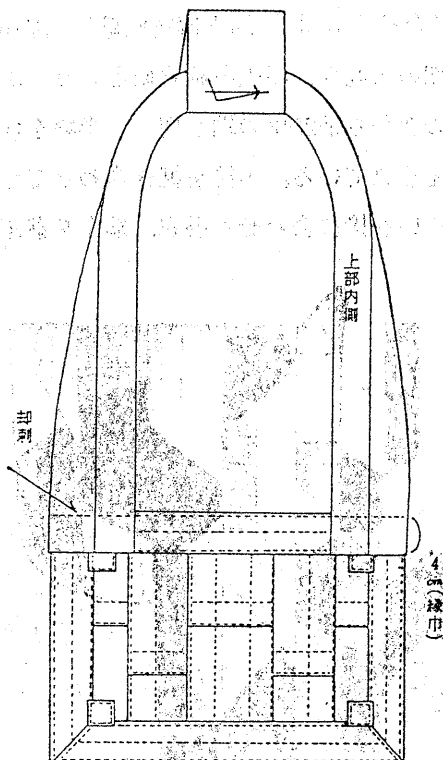
(図14) 金銀欄緞子等縫合せ胴服



(図15) 名物裂縫合せ片側帯

わせたお手玉なども、キルトされないパッチワークの類である。これらには配色の工夫は多少見られるが、図柄としての意味は余りない。金沢で古くから伝わる「百徳もらい」と呼ばれる産着は、小さな端ぎれを接ぎ合わせたパッチワークで、百人の人から一枚ず

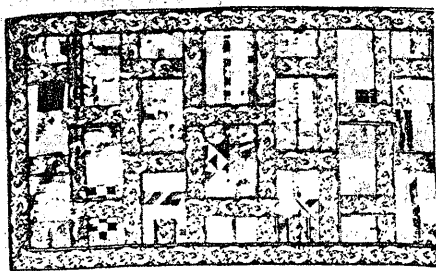
つ端切れを分けてもらい、それを母親が自分の手で仕上げたものであり、さまざまな悪魔から赤ちゃんを守る魔除けの効能があると言われる。



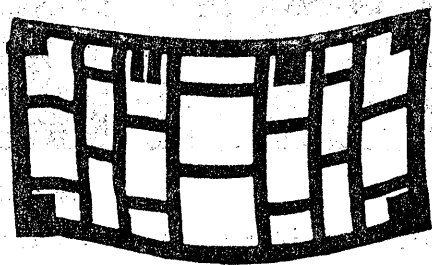
(図16) 袈裟

印度から伝承された僧侶の袈裟も細かい布の断片を貼り合わせたパッチワーク(図16)である。在家の人達の服装とも違い、外道の人達の服装とも異なる衣服が必要であったため、それを「^{せつる}截縷」と「^{せんしき}染色」の二つにおいてあらわしたのである。「^{せつる}截縷」とは、一枚の布を何枚かの布片に^{つづ}截断したものを縷り合わせて衣服にすることであり、「^{せんしき}染色」とは、一般在家で普通に用いられている色(原色、おもに白色)を避け、袈裟としてふさわしい色に染めるということである。その縫い方は、必ず「^{きやくしぬい}却刺縫」(返し縫い)の方法で、丈夫に作られた。さらに、「罪を掃き清める服」の意味で「糞掃衣」という形になり、不浄とおもわれている廃棄物の布を寄集めて作ったものが、仏法においては一番価値のある袈裟と言われたが、僧侶の地位の向上に伴い、上等の生地が使用されるようになった。

奈良時代のもので天台宗延暦寺蔵の「七条袈裟」(図17)は条、堤に^{でんそう}囲まれた田相部が小裂を接ぎ合わせた^{のうえ}柄衣形式(捨てられた布で作られる意)で横被が添えてあり、聖徳宗法隆寺蔵の「七条袈裟」(図18)は横被と修羅がつく甲袈裟形式である。左肩から右脇へ細くかける肩袈裟(図19)は、日露戦争当時の従軍僧が始めて使用したものである。

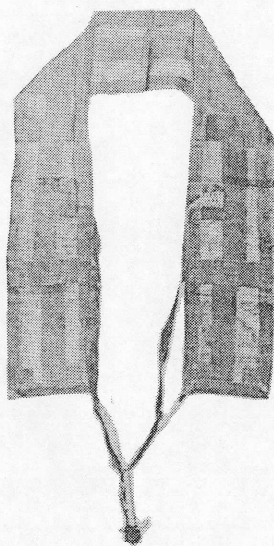


(図17) 七条袈裟



(図18) 七条袈裟

5. おわりに



(図19) 肩袈裟

パッチワーク・キルトに関心を持った動機は、アメリカン・キルトの美しさに惹かれたためであるが、その由来と発展は、他の工芸品同様、その国の歴史と環境に深く関わっていることが判る。端布（はぎれ）を利用して衣類を繕ったり、当布をして刺し子で補強するアイデアは、時と技法の多少の違いはあるにしても、布類が得難く、貴重であった生活環境から生れた共通の遮民的発想であるが、その後の発展形態は所によりさまざまである。アメリカン・キルトはヨーロッパからの移住者が開拓の苦勞と貧苦との戦いの中から作り出したもので、その技法は先祖から伝承されたものである。その美的価値が高まるにつれて、用途も衣類、ベッドカバー、敷物等の実用品からインテリア関係

の装飾品へと広がったのである。歴史を記念する文化財として保存されている当時のキルト作品が、布類に不自由を感じない現代人に見直され、その価値を再評価されて今日のブームを捲き起したものであろう。日本で見られるこの種の工作は、分離されたものが多く、パッチワークとしては、単に補強、補修のためのワン・パッチの類が普通であり、贅沢な緞子の布地でできた幡なども、キルトされないパッチワークであった。又印度から渡来した僧侶の袈裟は、質素を信条とする僧侶の自戒の証として小布を接ぎ合わせてあるが、刺し子になっていない。一方、キルトは補強と衿せ縫いのためだけに、稽古着や野良着、綿入れ等に施したもので、パッチワークの部類に入らない。最近のキルト製品は、防寒のため綿や羽毛を挟んで刺し子にした衣料、布団、スポーツ着等の実用品ばかりで、今後もその動向は変わらないであろう。又パッチワークの非連続性を特徴とするモザイク的技法も、刺繍と織布の中間的芸術として人々に愛好され、受継がれて行くものと思われる。然し、ここで強調したいことは、パッチワーク・キルトの美的価値や芸術上の将来性を論ずるより、原点に帰って創作の動機と環境条件を考え直すことである。僧侶の袈裟が意味する倫理観や個々の端布を巧みに利用したパッチワークの理念を忘れて、芸術的価値や貨幣価値だけを追求する現代社会の前途に、或る種の不安と抵抗を感じるからである。資源を再生利用して廃棄物を減らし、環境保護とリサイクルによる資源節約に努めることの重要性を認識しなければ、必然的に、人類を含む自然環境の破壊が急速に進んで行くことであろう。

〔参考文献〕

- 服装大百科事典 文化服装学院出版局
手芸百科事典 P・クラバーン著 雄鶏社
QUILTS マーガレット・M・カビガー原著 主婦の友社
AMERICAN IN PATCHWORK 西武美術館
パッチワーク・キルト 野原チャック著 日本放送出版協会
パッチワーク・キルトノート 主婦の友社
パッチワーク・キルト全集 1, 2, 生活の絵本社
袷の研究 沢木興道監修 大法輪閣